

定義語彙再考¹⁾

学習基本語彙選定の新基準

川 村 晶 彦

0. はじめに

Michael West の NMED (1935) といった先例はあるものの、現在一般に定義語彙(以下 DV)と呼ばれているものの原型は LDOCE1 (1978) の登場によって完成したと言ってよいであろう。以来 30 年以上の歳月を経たが、当初の目的である、全ての見出し語を学習者にとって既知の語のみで定義する、という理想はほぼ実現不可能であるということが分かってきた。それにもかかわらず、近年出版される 1 言語 EFL 辞典の多くが DV をセールスポイントの 1 つとして挙げている (CALD2 (2005); LDOCE4 (2003); OALD7 (2005))。このような状況を踏まえ、本小論では DV の問題点を再確認し、DV の教育的価値を学習基本語彙として新たな視点から見直してみたい。

1. 従来からの問題点

これまでに DV には様々な問題点が指摘されているが、大別して以下のよう分類することができる。

- 1) DV は原則的に学習者にとって既習あるいは既習である可能性が高い語句のみで構成されるべきであるが、必ずしもその原則が守られているとは

言えない (Fox, 1989; Herbst, 1986)。たとえば LDOCE2 (1987) の DV に含まれている decimal などは頻度の点からもむしろ難語の部類に入るものであろう。

- 2) DV を用いることによって定義が長くなる (Ichikawa et al., 1996; Kirkpatrick, 1985; Minamide, 1995)。たとえば, OALD7 は OALD6 (2000) よりも DV のサイズを約 500 語小さくした結果, soften が DV 外となり, 同語を用いた **cushion 1** (verb) の定義は以下のように 2 語長くなっている。

to soften the effect of a fall or hit (OALD6)

to make the effect of a fall or hit less severe (OALD7)

定義語彙が小さくなればなるほど, ある程度複雑な概念を表現するためにはいくつかの DV 語を組み合わせなければならず, これは当然起こりうる問題と言ってよい。英文自体が不自然でなければ本質的な問題とは言えないが, 辞書のように厳しいスペースの制約がある場合は致命的な欠点ともなりかねない。

- 3) DV による制限によって不自然な定義になる (Fox, 1989; Hanks, 1987; Kirkpatrick, 1985; Michiels and Noël, 1984; Minamide, 1995)。ある定義が自然であるか不自然であるかは完全に客観的に判断できるものではないが, 母語話者であれば当然使うべき表現を避けて DV 語でパラフレーズする以上, 少なからず不自然な表現になるということは大いに考えられる。

- 4) 語義には制限が加えられていない (Akasu, 1997; Béjoint, 1994; Fox, 1989; Hanks, 1987; Hartmann, 1989; Herbst, 1986; Jansen et al., 1987; Kawamura, 2001; Minamide, 1995; Neubauer, 1984)。たとえ DV 内の語であっても, 使用域が非常に限られたものである場合など基本的な語義以外で用いられた場合は DV として適当でない。たとえば, CIDE (1995; p. 1703) によれば church は建物としての「教会」の意でしか用いられない旨が明記されているが, 以下の定義では明らかにそのようには用いられていない:

A division of the Christian church which does not believe in the Trinity
(Unitarian)

5) 実際の DV のサイズが出版社側の主張よりも大きい (Fox, 1989; Herbst, 1986; Jansen et al, 1987; Kawamura, 2000, Kirkpatrick, 1985; Minamide, 1995)。DV のリストは後付に収録されていることが多いが、これらのリストは大抵の場合、DV 内の語を語幹とした派生語や成句を含まないなど実際の DV のサイズよりはるかに小さいものになっている。一定の限られた語彙のみで定義を行うことにより、定義が理解しやすくなると主張する以上、数を偽る、あるいは実数を推測困難な形で提示することは正当化できない。

6) DV が実際の定義中でどのように用いられているのかが明らかでない (Fox, 1989; Minamide, 1995)。DV 外の語句を使用する際は、その点を明示している辞書がほとんどであるが、実際には被定義項とその定義に用いられている語のエントリーが近い場合や固有名詞などはマークしないといった例外が存在する (LDOCE3 (1995))。

おそらく、ユーザーの側から見て最も深刻な問題は5)と6)であろう。DV のサイズが小さければ小さいほど、また、例外が少なければ少ないほど、DV の完成度が高く、学習者にとって定義は理解しやすいものだという印象を使用者に与えることができる。したがって、出版社側がさまざまな手段を使って DV のサイズをより小さく、また例外的な使用を目に触れないようにしようとした結果が5)と6)につながっているからである。

DV 使用の実態を知るためには出版社側の主張を鵜呑みにするわけにはいかない。そこで以下の2および3節では、近年刊行された1言語 EFL 辞典のうち COBUILD シリーズの上級学習辞典として初めて DV のリストを収録した COBAM (2007) の DV をサンプルとし、同辞書の前付及び後付の解説も参考にした上で、あくまでも実際の定義中での使用に基づいて検証を行うこととする²⁾。

2. 前付および後付

前付によると，COBAM の DV に関する基本方針は以下の通りである：

Whenever possible, words are explained using simpler and more common words. This gives us a natural defining vocabulary with most words in our definitions being among the 2,500 most common words of English (p. xiii)

被定義項の定義に用いられる語句は被定義項自体よりも簡単で一般的な語を用いるとされているが，それはあくまでも可能な場合のみに限られるということである。また，a natural defining vocabulary に対する言及はあるが，後付にリストが収録されている DV (pp. 1575-84) との関係については説明がない。後付の DV リストにも，このリストに収録された語彙がいかなる性質のものなのか，またそのサイズを含めて一切説明がなく，実際にカウントしてみると，上記の方針から予想される 2,500 語ではなく 3,221 語が掲載されている。さらに，少数の複合語が含まれる以外，成句は 1 つも収録されていないが，成句抜きで定義を行うことは事実上不可能であり，リストに載っていない成句も当然使われていると見るべきであろう。

あまりにも厳密に DV を用いることで定義が不自然，冗長，さらにはスペースの問題から情報量が不足してしまうという危険性も指摘されているが，他社の DV は DV 外の語の使用についてもある程度は明確に規定されている。少なくとも，DV 外の語を用いる際にはスモール・キャピタルでマークすると規定してある場合が多く (OALD7 (R99); LAAD2 (2007; p. 1852))，上記の COBAM の説明は全く情報不足であると言わざるを得ない。

前付，後付ともにこれ以上の情報を提供してくれないため，以下の節では COBAM の定義を実際に検証してみることとする。今回の検証では以下の各ページ上の全定義を対象とした：pp. 100-1, 200-1, 300-1, 400-1, 500-1, 600-1, 700-1, 800-1, 900-1, 1000-1, 1100-1, 1200-1, 1300-1, 1400-1, 1500-1。

3 . 定義中の DV の使用

COBAM の前付によれば , a natural defining vocabulary の大部分は英語の最も一般的な 2 500 の語に含まれるという。しかし , 後付の DV リストにはそれをはるかに上回る数の語が収録されていた。さらに , サンプルページの検証からはその DV リスト収録外の語も特にマークせず用いられていることが分かる :

If you have a sty, your eyelid is red and swollen because part of it is infected.
(sty)

上記の定義は比較的短いものだが , eyelid , swollen , infected という 3 つの DV 外の語が用いられており , こういった例はサンプルページを通して散見する (e.g. **crescent**; **manure**)。

同様に , この問題は成句にも当てはまる :

An **abbreviation** is a short form of a word or phrase, made by leaving out some of the letters or by using only the first letter of each word. (**abbreviation**)

If you **happen to** do something, you do it by chance. If **it happens that** something is the case, it occurs by chance. (**happen 4**)

abbreviation の定義に用いられている leave out, **happen** の定義に用いられている by chance, be the case はいずれも DV のリストには載っていないが , これらの成句もまた何らマークせずに用いられている。

語義に対する制限という意味でも COBAM の DV は DV の一般的原則に違反している :

An **octave** is a series of eight notes in a musical scale. It is also used to talk about the difference between the first and last notes in a musical scale. (**octave**)

上記の定義中，note と scale がそれぞれ2回ずつ用いられているが，いずれも学習者にとって馴染みのある語義とは言えないであろう。

COBAM は前付で DV の具体的な使用法について触れていないため，どのような使い方をしてもそれは批判には値しないという見方もあるが，仮にも DV の採用を謳うのであれば，こういった DV の一般的慣習に違反することは問題であり，厳密には DV を採用しているとは言えないであろう。

4．DV と商業主義

競争の激しい EFL 辞典市場において DV はもはや1言語 EFL 辞典の標準装備とさえなりつつある。したがって，DV の採否が売り上げに大きく影響してくることは想像に難くない。さらに，COBAM 以外の上級者向け1言語 EFL 辞典の大方が DV をセールスポイントの1つとして挙げていることも考慮すると，COBAM が狭義の DV を採用している可能性が極めて低いにも関わらず DV のリストを収録し，DV の採用をしているかのような印象を与えているのも商業主義と無関係ではないであろう。

しかしながら，COBAM の場合を抜きにしても，いずれの辞書の DV にも数多くの例外が存在し，実際に用いられている DV のサイズ，DV の使用法，ひいては DV が実際に定義を理解しやすくする上で貢献しているのかどうかさえ使用者の側では知ることができないという点は見逃してはならない。

かつてのような意味論的記述だけではなく語用論的情報や社会言語学的情報までが定義中に組み入れられるようになった現在，こういった多様なカテゴリーの情報を学習者にとって既習の語彙のみで定義するというのはやはり実現不可能な理想と言わざるを得ない。事実，DV 外の語句の使用を避けるために，学習者にとって理解しやすい語のみで全ての定義を執筆する，という当初の理想とは反対に，レキシコグラファーにとって「定義を執筆しやすい」語かどうか DV 選択の際の重要な基準になっているという指摘がある (Ayto, 1984)。もはや DV はその存在価値を根本から見直すべき時期に来ているのである。

5．既習語彙から学習目標語彙へ

DV を用いて定義を行うレキシコグラファー側の問題点として，LDOCE1 の

DV では、たとえば process といった、定義の基本構造の一部となりうる非常にプロダクティブな語が欠けていたという指摘がある (Ayto, *ibid.*)。辞書執筆の長い歴史を考えれば、伝統的に定義に欠かすことのできない語というものは確かに存在するであろう。さらに、辞書の定義というものはある事物なり概念を知らない使用者に説明するためのものであり、そういった定義に欠かすことのできない語は、辞書という文脈を離れてみても、学習者が自分の考えや感情を表現するために役立つ非常にプロダクティブな語に違いない。たとえば、OALD7 に導入された Oxford 3000 は DV だけでなく学習基本語彙としての性格も併せ持ち、今後の DV の新しい形と言えそうである。

Oxford 3000 は従来の DV のように BNC といったコーパスにおける頻度だけではなく、使用コンテキストが限定的でないもの、母語話者にとって馴染みがあるもの、といった3つの選択基準に基づいているが (R99)、上述の DV の発信語彙としての教育的価値もある程度考慮しているようである (*ibid.*)。特定の語句の発信語彙としての有効性をどのように判断したのかは詳しい説明がないが、たとえば CCEED (1988) の DV は同辞書の全定義中で 10 回以上用いられた語を集めたものであるらしい (Fox, 1989)。Oxford 3000 の場合も、当然 CCEED のように定義中の DV 語の頻度のカウントは行っているのではないだろうか。COBUILD や Oxford 以外の出版社であっても、今日のようにコンピュータ全盛の時代にあっては、定義で用いられる語句に関する頻度のデータは以前とは比較にならないほど容易に入手可能なはずである。そういった情報は商業主義によって隠すよりは、むしろ積極的に公開していくべきものであろう。

発信語彙としての DV の可能性は非常に期待のもてるものであるが、受信語彙も念頭においた学習基本語彙としての完成度を検証するために Oxford 3000 と OALD として初めて DV を導入した OALD5 (1995) の DV の比較検討を行った³⁾。以下は A の項目について JACET 8000 の順位と比較を行ったものであり、-ly 副詞や分詞は語幹となる語および原形での順位、成句の場合は中心となる内容語の順位で計算してある：

+5-ox3000

abnormal, abnormally, abstract, absurd, acceptance, accessible, accumulate, accuracy, accusation, adjective, adjustment, administration, administrative, admission, adverb, adviser, aggressively, agricultural, agriculture, alert, alike, allowance, ambitious,

amusement, ancestor, announcement, annoyance, apparatus, appetite, appliance, appreciation, arch, architecture, armour, ash, assemble, assembly, assert, assess, astonish, astonishing, atmospheric, atomic, awareness

JACET 8000 による平均順位：3 887 未収録語：x1

-5+ox3000

an, abandoned, abuse, accent, by accident, accidental, take action, actress, ad, adequately, advanced, take advantage of, afford, aged, agency, alarming, alarmed, all right, ally, allied, alongside, alphabetical, alphabetically, alternatively, altogether, a.m., amaze, amazing, amazed, ambulance, amused, annoyed, annually, anti-, anticipate, anxiously, apart from, apartment, apologize, apparent, approving, approximate, April, arise, arrow, aside from, fall asleep, assistance, associated with, assure, attached, attempted, pay attention, attorney, August, awful, awfully, awkwardly

JACET 8000 による平均順位：2 927 未収録語 x6

JACET 8000 の平均順位から判断する限り，Oxford 3000 は全体的に頻度が高いものが多く含まれており，DV としての完成度も高いものだと言えそうである。さらに，by accident といった成句，take action といったコロケーションに加え，April や August といった通常は DV に含まれないものまで収録されている点は特筆に値する。原則的に，辞書の定義は特定の空間や時間に拘束されない普遍的な情報を記述したものであり，月の名などは含まれないのが普通だが，4 で述べたように，現在の辞書には多様なカテゴリーの情報が収録されるようになってきている。そのため，たとえば，百科的な情報を扱うためにはこういった語も必要となるだろう。また，受信語彙としては当然ながらこういった語句を欠かすことはできないのである。

6. むすび

従来の語彙表では頻度ばかりが重視されてきたが，JACET 8000 にしても，そういった影響から blackboard といった学校生活というコンテキストでは欠かすことのできない語が抜けているなど問題点も多い。また，DV は商業主義の結びつきによって，その実態を使用者から遠ざけてきたが，発信語彙としての可能性に目を向けてみると，その教育的価値は高いものだと言えそうである。

ただし、DV の教育的価値については、学習者が語彙を拡大する機会を奪ってしまう (Béjoint, 1994)、出版社側が DV には高頻度な語句だけでなく定義に有用な語も少なからず含まれているという事実を隠しているため、DV を採用した辞書の定義で未知の語句に出くわした学習者が学習意欲をそがれてしまうという危険性も報告されている (Kawamura, 2002)。やはり、狭義の DV はその役割を終えつつあるのかも知れない。少なくとも、DV はこれまでのように、例外を少なく見せ、かつサイズを可能な限り小さく見せるという姿勢から脱却し、たとえ頻度が低い語であっても発信語彙として教育的価値が高いものは積極的にその点を明示し、これまで頻度が中心であった学習基本語彙選定の新たな基準の 1 つとしての性格がむしろ期待されていくのではないだろうか。

注

- 1) 本稿は、2007 年度および 2008 年度の成城大学特別研究助成「最新の英語学総合研究」の成果の一部であり、2008 年 6 月 21 日、成城大学において開催された日本英語表現学会第 37 回大会で「定義語彙再考」と題して行った口頭発表に加筆修正を加えたものである。貴重なコメントをくださった司会の山本英一先生をはじめ先生方にはここに記してお礼を申し上げる。
- 2) 筆者は Masuda, H. et al. (印刷中) で COBAM の定義の分析を担当しており、本稿で使用した COBAM の DV に関するデータと引用例の一部には上記論文と共通するものも含まれる。
- 3) 比較検討を行ったのはアルファベットの字母 A, G, M, S, Y で始まる全項目である。
+5-ox3000 は OALD5 の DV には含まれているが、Oxford 3000 には収録されていないもの。
-5+ox3000 は OALD5 には収録されず、Oxford 3000 にのみ含まれているものを指している：

+5-ox3000

gallery, gang, garment, gathering, gesture, ghost, glow, goat, golden, golf, goodness, gossip, graceful, gratitude, greedy, greet, greeting, grief, grind, grip, guidance, guilt

madness, magical, magistrate, magnificent, making, marble, margin, marking, mat, mature, mechanical, mechanism, medieval, mend, messenger, metallic, metric, mill, million, miserable, missile, mist, mock, moderate, modest, monkey, motorist, mould, movable, mutual, myth

sacred, sacrifice, saint, sake, sandwich, satisfactory, scatter, scenery, scope, scrap, scrape, sea bird, sea-fish, securely, seize, sentimental, sequence, setting, seventh, shed, shield, shopkeeper, shopping, shore, shorten, shrink, sin, situate, six, sixth, sketch, slave, slender, soak, soften, sole, solemn, solemnly, sorrow, spacecraft, specialize, specify, spectacle, spectator, spending, splendid, sporting, staircase, stake, stall, stem, stimulate, stitch, storage, strand, strap, straw, strengthen, strong-smelling, submit, succession, successive, summon, sunlight, supervise, suppress, supreme, suspend, sweet-smelling, sword, syllable

社会イノベーション研究

yield

-5+ox3000

g, gallon, gambling, garage, garbage, gasoline, in general, generate, gentleman, genuinely, geography, get on, get off, giant, girlfriend, give sth away, give sth out, give sth up, glasses, global, gm, go down, go up, be going to, good at, good for, governor, grab, gram, grandchild, granddaughter, grandparent, grandson, grant, gray, grocery, groceries, grow up, guy

make sth up, make-up, mall, manufacturing, manufacturer, March, marketing, married, massive, master, matching, mate, mathematics, May, maybe, mayor, by means of, meanwhile, media, in memory of, menu, mere, merely, mg, mid-, midday, milligram, millimetre, minimum, ministry, minority, Miss, missing, mistaken, mixed, mm, mobile, mobile phone, mom, Monday, monitor, moreover, motorcycle, mount, moving, movie, movie theater, Mr, Mrs, Ms, mum

sack, sadly, sailing, salad, satisfied, satisfying, Saturday, saving, scare, scared, schedule, scissors, scream, secretary, sector, self, self-, senate, senator, separated, September, session, shall, shaped, shift, shocked, shooting, shortly, be sick, feel sick, significant, significantly, sincerely, Yours sincerely, sir, sit down, -sized, smash, softly, software, somewhat, as soon as, spare, spoken, specifically, spicy, spider, spoken, squeeze, stand up, stick out, stiffly, stove, strategy, stressed, stripe, striped, studio, substantial, substantially, unsuccessful, such as, sufficiently, suited, suitcase, Sunday, supermarket, make sure, surname, surprisingly, surrounding, swearing, sweater, swollen (swell), swimming, swimming pool, swollen

yawn, yeah

Oxford 3000 は Language Study Terms (以下 LST) も DV の一部として用いているため, こちらの検討も行った。+5+LST は OALD5 の DV には収録されているが, Oxford 3000 には収録されておらず, LST には含まれているもの。-5+LST は OALD5 の DV, Oxford 3000 のいずれにも収録されていないが, LST には含まれているものである:

+5+LST

adjective, adverb

syllable

-5+LST

abbreviation, apostrophe, auxiliary

gerund

modal

saying, semicolon, singular, slang, slash, suffix, superlative

定義語彙再考

引用辞書，語彙表および略語

- CALD2: *Cambridge Advanced Learner's Dictionary*, 2nd Edition. Cambridge: Cambridge University Press, 2005.
- CCEED: *Collins COBUILD Essential English Dictionary*, London and Glasgow: Collins, 1988
- CIDE: *Cambridge International Dictionary of English*. Cambridge: Cambridge University Press, 1995.
- COB5: *Collins COBUILD Advanced Learner's English Dictionary*, New Edition. Glasgow: HarperCollins, 2006.
- COBAM: *Collins COBUILD Advanced Dictionary of American English*. Glasgow: HarperCollins, 2007.
- JACET 8000: 『大学英語教育学会基本語リスト』, 大学英語教育学会, 2003.
- LAAD2: *Longman Advanced American Dictionary*, 2nd Edition. Harlow: Pearson Education, 2007.
- LDOCE1: *Longman Dictionary of Contemporary English*, 1st Edition. Harlow: Longman, 1987
- LDOCE2: *Longman Dictionary of Contemporary English*, 2nd Edition. Harlow: Longman, 1987.
- LDOCE3: *Longman Dictionary of Contemporary English*, 3rd Edition. Harlow: Longman, 1995
- LDOCE4: *Longman Dictionary of Contemporary English*, 4th Edition. Harlow: Pearson Education, 2003.
- NMED: *New Method English Dictionary*, London: Longman, 1935.
- OALD5: *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 5th edition. Oxford: Oxford University Press, 1995.
- OALD6: *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 6th edition. Oxford: Oxford University Press, 2000
- OALD7: *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 7th edition. Oxford: Oxford University Press, 2005.

引用文献

- 赤須 薫 . (1997) , 「定義語彙の選定を考える」, *Random* 22, 1-10.
- Ayto, J. (1984), 'The vocabulary of definitions', in: D. Götz et al., eds. *Theoretische und praktische Probleme der Lexikographie*, München: Hueber, 50-62.
- Béjoint, H. (1994), *Tradition and Innovation in Modern English Dictionaries*, Oxford: Clarendon Press.
- Fox, G. (1989), 'A vocabulary for writing dictionaries', in: M. L. Tickoo ed. *Learners' Dictionaries. State of the Art*, Singapore: SEAMEO Regional Language Centre, 153-71.
- Hanks, P. (1987), 'Definitions and explanations' in: J. M. Sinclair, ed. *Looking Up: An Account of the COBUILD Project in Lexical Computing and the Development of The Collins COBUILD English Language Dictionary*, London and Glasgow: Collins, 116-136.
- Hartmann, R. R. K. (1989), 'The dictionary as an aid to foreign-language teaching', in: F. J. Hausmann et al., eds. *Wörterbücher/Dictionaries/Dictionnaires. An International Encyclopedia of Lexicography*, Berlin: W. de Gruyter. I, 181-9.
- Herbst, T. (1986), 'Defining with a controlled defining vocabulary in a foreign learners' dictionaries', *Lexicographica* 2, 101-19.
- Ichikawa, Y. et al. (1996), 'An analysis of *Oxford Advanced Learners' Dictionary of Current English*, Fifth Edition', *Lexicon* 26, 142-77.
- Jansen, J. Mergeai, J. P., and Vanandroye, J. (1987), 'Controlling LDOCE's controlled vocabulary', in: A. P. Cowie, ed. *The Dictionary and the Language Learner*, Tübingen: M. Niemeyer, 78-94.
- Kawamura, A. (2000), 'Controlled defining vocabulary reconsidered—with special reference to the *Oxford Advanced learners' Dictionary of Current English*, Sixth Edition—', *Random* 25, 127-34.

- (2001), 'A critical study of *defining vocabulary*: hard words for Japanese users', *Random* 26, 49-69.
- (2002), 'A Review of Existing Criticisms of *Defining Vocabulary*', *Bulletin of Graduate School of Toyo University* 38, 324-36.
- Kirkpatrick, B. (1985), 'A lexicographical dilemma: monolingual dictionaries for the native speaker and for the learner', in: R. Ilson, ed. *Dictionaries, Lexicography and Language Learning*, Oxford: Pergamon Press, 7-13.
- Masuda, H. et al. (印刷中), 'An analysis of *Collins COBUILD Advanced Dictionary of American English*', *Lexicon* 38.
- Michiels, A. and Noël, J. (1984), 'The pro's and con's of a controlled defining vocabulary', in: R. R. K. Hartmann, ed. *LEXeter '83 Proceedings*, Tübingen: M. Niemeyer, 385-94.
- 南出康世 . (1995) , 「制限語彙による定義とその問題点」, 『英語教育』 44/3, 78-9.
- Neubauer, F. (1984), 'The language of explanation in monolingual dictionaries', in: R. R. K. Hartmann, ed. *LEXeter '83 Proceedings*, Tübingen: M. Niemeyer. 117-23.